

# 本 山 古 墳 群

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―五

本山古墳群

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所



# 本 山 古 墳 群

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、老人ホーム建設工事に伴う本山古墳群の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

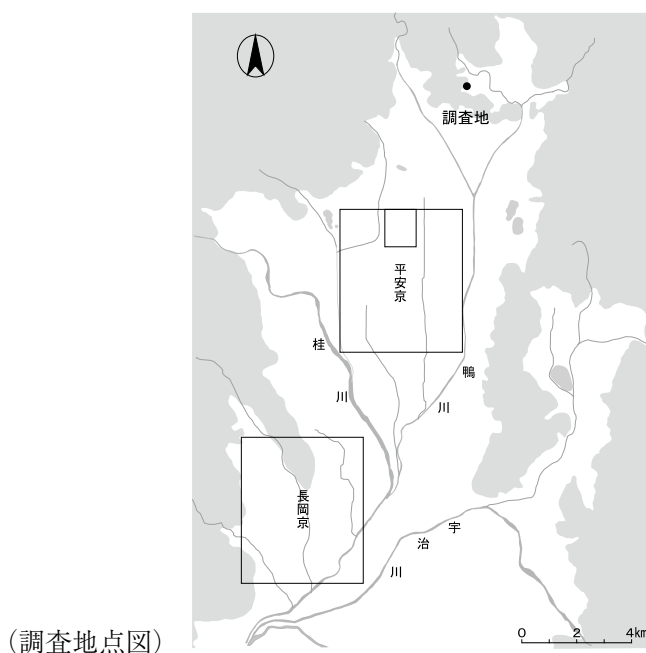
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成 24 年 8 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |  |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名  | 本山古墳群（文化財保護課番号 11 S 478）                       |
| 2 調査所在地  | 京都市左京区岩倉幡枝町333番3                               |
| 3 委 託 者  | 大西 均   |
| 4 調査期間   | 2012年5月14日～2010年6月8日                           |
| 5 調査面積   | 340㎡   |
| 6 調査担当者  | 辻 裕司   |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「二軒茶屋」・「幡枝」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）                 |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                                 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。              |
| 11 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                           |
| 12 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                            |
| 13 本書作成  | 辻 裕司   |
| 14 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。     |



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	4
(1) 1区	4
(2) 2区	6
4. 遺 物	7
(1) 遺物の概要	7
(2) 古墳時代の遺物	7
(3) 平安時代の遺物	8
(4) 室町時代の遺物	9
5. ま と め	9
(1) 1号墳の現況	9
(2) 1号墳の形態	10
(3) 出土遺物について	10

# 図 版 目 次

図版1	遺構	地形測量図 (1 : 250)
図版2	遺構	1区平面図 (1 : 100)
図版3	遺構	1区石室実測図 (1 : 50)
図版4	遺構	1区石室断面図 (1 : 50)
図版5	遺構	1 1区全景 (南東から) 2 2区全景 (南東から) 3 2区断面 (北西から)
図版6	遺構	1 1区1号墳玄室石積状況 (南西から) 2 1区1号墳羨道石積状況 (北東から)
図版7	遺構	1 1号墳羨道部東側袖石据付掘形 (北西から) 2 1号墳羨道部西側石据付掘形 (北西から) 3 1号墳羨道部遺物出土状況 (南東から) 4 1号墳玄室遺物出土状況 (南東から)
図版8	遺物	1号墳出土遺物

# 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	試掘調査地点および調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（南から）	3
図4	作業風景（南東から）	3
図5	1区西壁断面図（1：100）	5
図6	2区遺構実測図（1：100）	6
図7	石室出土遺物実測図（土器1：4、耳環1：2）	8
図8	土坑6・表土層出土遺物実測図（土器1：4、鴟尾1：3）	9
図9	1号墳平面模式図（1：100）	10

# 表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	7



# 本山古墳群

## 1. 調査経過

調査地点は、本山古墳群として周知される群集墳内の北東部に位置し、西側の標高200m前後の小高い本山丘陵から岩倉盆地に向かって下がる東斜面の裾部に該当する。調査対象地の現況は、孟宗竹の竹林を主体とする雑木林で、調査対象地内での標高差は約4mあり、対象地内には、2基の古墳と想定される盛土状の高まりが現存していた。

当該地に老人ホーム建設が計画されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）により対象地内で平成19年度<sup>1)</sup>・平成24年度の2度にわたり試掘調査が実施された（図2）。平成19年度の試掘調査のうち、「H19-3T」では、古墳と断定できる調査結果は得られなかったが、墳丘盛土の可能性のある土層が確認され、古墳（仮称・A号墳）として扱われた。「H19-4T」では、現況から墳丘および石室抜き取り痕から古墳と推定され、調査では古墳の周溝と考えられる落ち込みが検出されたことから、古墳（仮称・B号墳）とされた。また、「H19-7T」では、『京都府遺跡地図』<sup>2)</sup>に記載があり、古墳として周知されていたが、試掘調査の結果、墳丘状の高まりは近年の盛土であることが明らかとなった。それら試掘調査成果を基に、文化財保護課の指導を受け、当研究所が発掘調査を実施することになった。

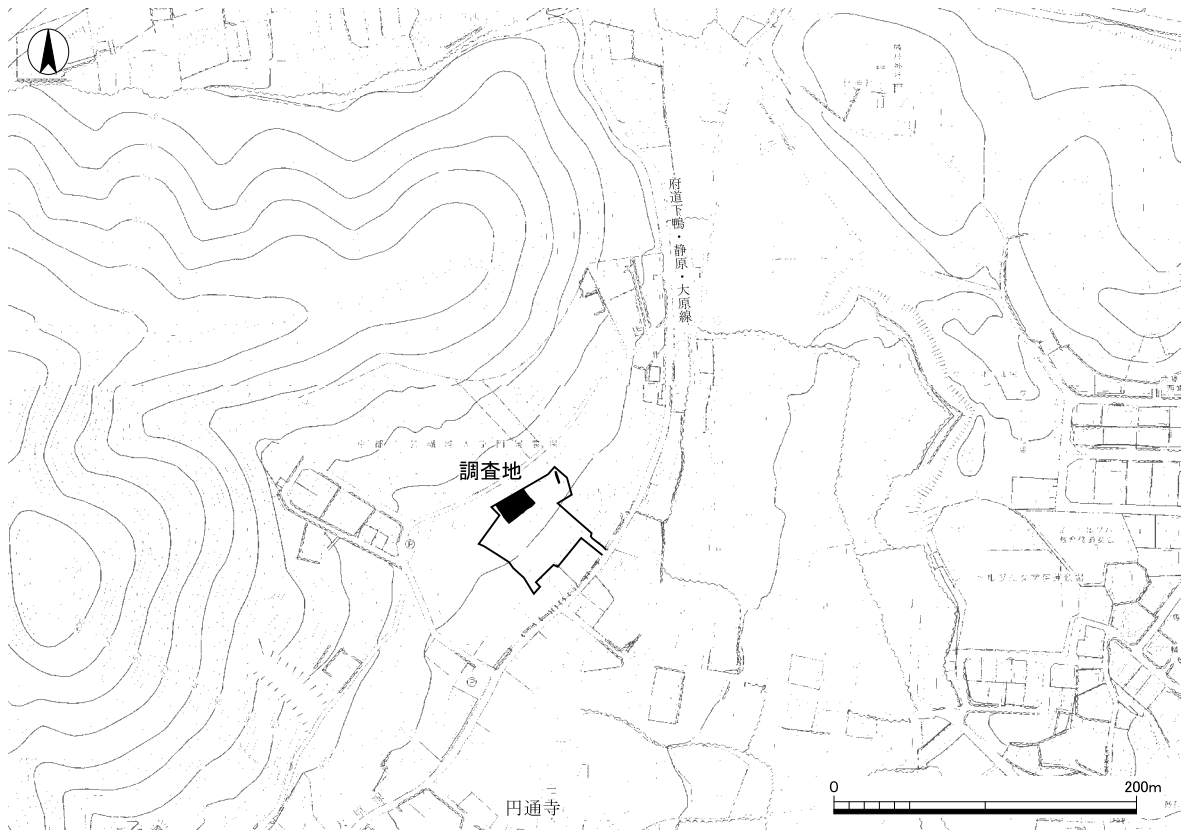


図1 調査位置図（1：5,000）

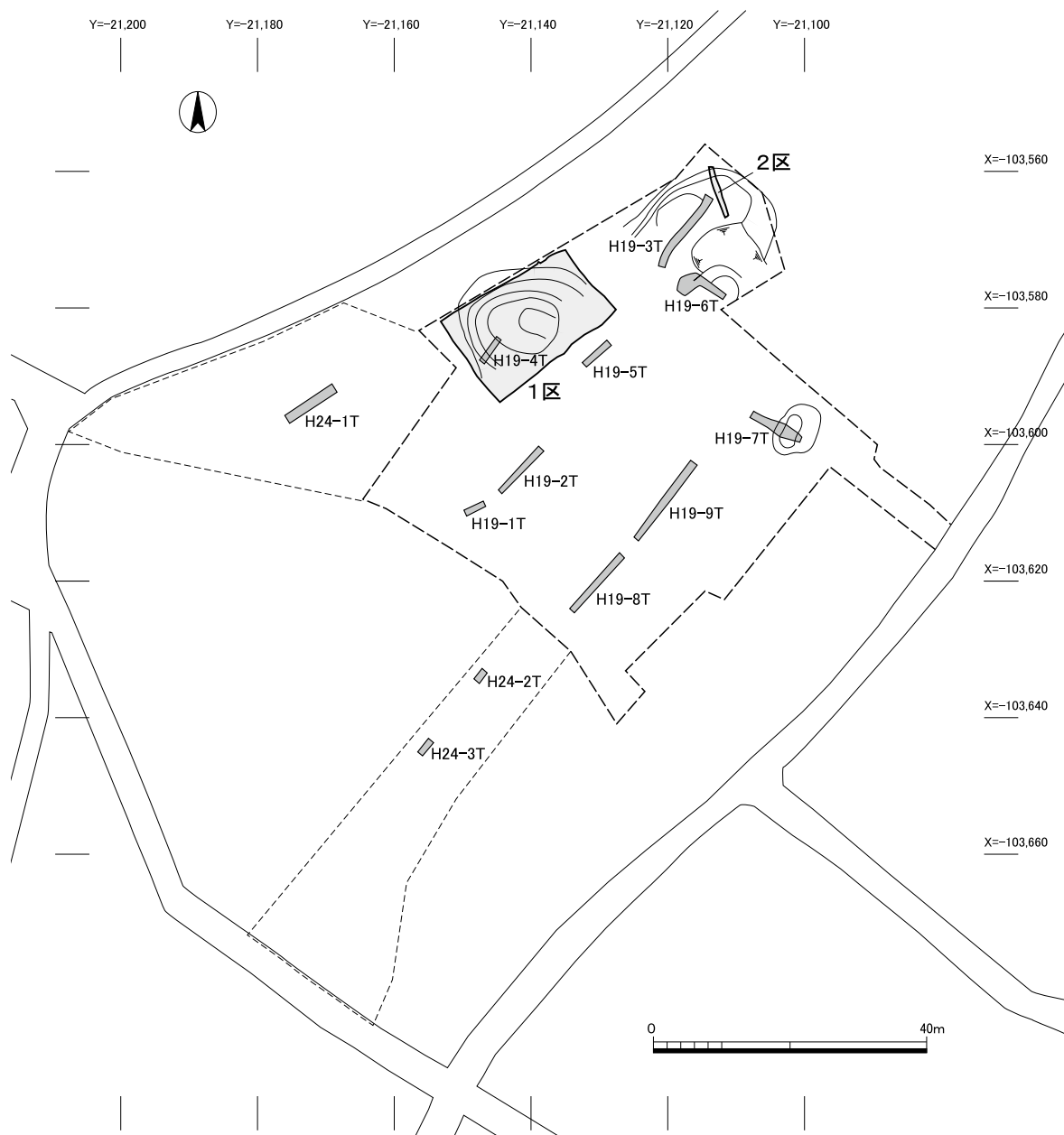


図2 試掘調査地点および調査区配置図（1：1,000）

本山古墳群は、岩倉盆地西部の本山丘陵裾部に位置する古墳群で、『京都市遺跡地図』によれば、30基程の群集墳とされる。本群集墳内では、これまでに、当調査地点から南西方向に位置する本山神明1号墳の石室が調査され、6世紀前半の古墳であると想定された<sup>3)</sup>成果はあるが、群集墳についての実態はよくわかっていなかった。

今回の発掘調査目的は、古墳と想定される盛土部2基の実態についての検証を経て、古墳であることが判明した場合は、墳丘規模・主体部の構造・築造時期などを明らかにし、記録保存に努めることであった。

北東側の調査地点では盛土の崩落ないし削平が激しく、南西側の調査地点では盛土が一部残存しているものの、中央部は落ち込んでいた。このため、北東側の地点では、古墳の想定される中央部にトレンチを設定し（2区）、南西側の地点には、盛り上がりのある部分から周溝が想定できる

範囲までを調査区（1区）とした。調査面積は、1区が約324㎡、2区が約14㎡あり、合計約340㎡となった。

発掘調査は平成24年（2012）5月14日から開始した。まず、5月14日の基準点測量設置後、5月16日の現況地形測量から開始した。地形測量終了後の5月17日は、重機による表土剥ぎ、および竹木の伐根を進め、5月22日から人力による調査を行った。調査の進捗に従い、検出遺構については、平面実測・断面実測・立面実測・平板実測を、調査区全体については、地形測量などで記録した。また、写真撮影については、6月1日に調査区全景写真撮影、ならびに主要な個別近景写真撮影を行い、調査過程は、必要に応じ近景写真撮影を行った。6月8日には、全ての発掘調査を終了した。

発掘調査の進捗に従い、文化財保護課による指導を受けた。調査開始直後の調査区域ならびに重機掘削状況の確認を始めとして、調査の進展に伴い、各調査経過の節目に指導を受け、調査を進めた。また、発掘調査終了の確認を受けた。

本山古墳群における実質的な調査の初例となるため、京都産業大学の鈴木久男氏、立命館大学の和田晴吾氏、花園大学の高橋克壽氏には、現地にて古墳の構造や調査方法に関する、多くのご指導を頂いた。

なお、今回1区で検出した古墳は、文化財保護課の調整のもと、本山古墳群1号墳とした。

## 2. 位置と環境

調査地点は、岩倉盆地の南西部に位置し、古墳や窯跡など多くの遺跡が分布する地域として周知される地区である。古墳群については、5世紀代に築造された幡枝1・2号墳（松ヶ崎丘陵西裾）を初めとし、ケシ山古墳群（ケシ山山頂）、八幡古墳群（幡枝丘陵の西に派生する八幡山南裾）、本山古墳群（本山丘陵東裾）などが分布し、7世紀代には終焉を迎えることが知られている。

窯跡については、幡枝元稻荷窯、栗栖野窯、妙満寺窯など、幡枝丘陵を取り巻くように窯が分布している。この他、本山丘陵南東裾部には本山官山窯がある。これらの窯跡は、調査地点からは直線距離で200～500m離れており、年代としては、7～8世紀代のものと9世紀以降のものがある。



図3 調査前全景（南から）



図4 作業風景（南東から）

### 3. 遺 構

調査区として設定した1・2区は、直線距離にして約20m程離れており、現況も異なるため、以下1区・2区の順に調査概要を示す。

#### (1) 1区 (図版2・5)

##### 調査区の現況

1区は、調査区北西部寄りに墳丘と考えられる高まりが遺存しており、文化財保護課の試掘調査(H19-4T)では、墳丘南側で周溝と考えられる溝が検出されている。

調査区の現況は、北東隅が最も高く、南西側へ向かって緩傾斜を呈し、現況では約3m程の高低差がある。調査区内では墳丘と考えられる高まり頂部が最も高く、標高約113mある。墳丘状高まりの北西側傾斜面と墳丘状高まり間は、谷状を呈する。

遺構は、地山上面ならびに古墳墳丘封土上面で検出した。検出した遺構には、古墳時代後期の古墳である1号墳、室町時代後期の柱穴列・土坑などがある。

##### 基本層序 (図5)

現地表から竹林表土が厚さ0.1mあり、西側では竹林表土下に竹林造成土と考えられる土層が厚さ0.1m堆積する。竹林造成土下は地山となり、地山上面は古墳の封土が残存する。地山は、残存する箇所では、当時の地表面であったと考えられる極暗褐色砂泥層が堆積し、同層の下層には黄褐色砂泥層が堆積する。

##### 1号墳 (図版3・4・6・7)

**検出状況** 調査区中央部で検出した古墳である。前述したように、古墳の周囲は相当箇所が削平されているが、平面形は、後述する周溝の形状から円墳と考えている。1号墳の背面に当たる北西斜面側の地山層を削り、墳丘の周囲に周溝を巡らす。主体部は、横穴式石室である。開口部は、南東方向を示す。奥壁および羨道部端は、後世の遺構や攪乱などにより削平を受け、現存しない。

周溝は、古墳の周囲を巡る状態で検出した。竹根などで攪乱を受け各地点で途切れる。南東側の大半は攪乱を受け遺存しない。検出面での規模は、溝芯々間で径約15m、幅0.8～2.1mある。北西側の埋土から須恵器壺の破片が出土した。

以下、古墳・石室の位置記述は、石室の中軸線および開口部を起点として各残存箇所を示す。

**墳丘および封土** 検出した古墳は、極暗褐色砂泥層など地山上面に直接盛土して墳丘部を造成する。古墳左奥の墳丘が残存している箇所の断面観察では、9層の封土を確認している。封土は、

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代後期	1号墳	
室町時代後期	柱穴列、土坑	

厚さ0.2～0.6mある。概して地山などの土層を使用し、褐色系を呈する。土層内には地山に包含される長軸1～5cm、中には0.2m程度の細角礫や地山ブロックが含まれる。現存での墳丘の残存高は、南端の周溝底面から約2.6mある。

**内部構造** 石室の天井部・奥壁および玄室側壁左側と羨道部側壁右側は、後述する室町時代後期の石材再利用によって石材が抜き取り去られている。石材にはチャートを使用する。石材は、玄室左側では2段、羨道部右側では3段遺存しており、閉塞石跡には石材が散乱する。石室の平面形は、後述する石室掘形の形状や袖石相当箇所の掘形検出例により、羨道部右側に袖を造り出す片袖式と考えている。石室の主軸方向は、座標北に対し西へ約30°振れる。

玄室側壁左側には、石材は遺存していないが、据え付け時に敷設された根石と考えられる石材が直線的に遺存している。また、羨道部では、側壁右側の石材は遺存していないが、床面を敷設した際の土層とは異なる土層境界線を、石室主軸方向と併行する直線方向に延長する位置で検出している。これは、羨道部側壁右側の石材抜き取り後に生じた土坑6の土層との境界線であり、抜き取り時に若干の破壊はあるものの、概して羨道部側壁石材を据えた痕跡を示していると捉えることができる。

検出状態を基に石室の現存規模を想定すると、石室の検出面での現存規模は、現存長約6.2mある。このうち、玄室は、現存長約2.0m、幅約1.4m、羨道部は、現存長約4.0m、幅約1.2mある。検出面での石室の現存規模は、玄室が長さ約2.1m、床面からの高さ約0.5m、羨道部が長さ約3m、床面からの高さ約0.75mある。残存する石材の規模は、玄室では、長軸0.4～1m、羨道部では、長軸0.3～1mある。

玄室および羨道部には、石材設置後それぞれ床用の入れ土を施し、さらに、玄室では角礫を多く含む土層で床面を形成している。また、羨道部の開口部寄りに閉塞石に相当する石材が数石遺存していた。閉塞石には長軸0.1～0.3mの角礫を用いる。

袖石相当箇所の下面で、袖石を据え付け時の根石を検出した。長軸0.1～0.4mの石材を円形に巡らす。内部径は約0.5mある。

**遺物出土状態** 遺物は、玄室の袖石付近から羨道部の閉塞石を超えた範囲に、床面からわずかに浮いた状態で、須恵器杯Hの杯・蓋、および須恵器杯Gの杯・蓋、耳環が点在していた。検出数は、閉塞石付近が最も多い。出土遺物の概要に付いては、遺物の章で述べることとする。

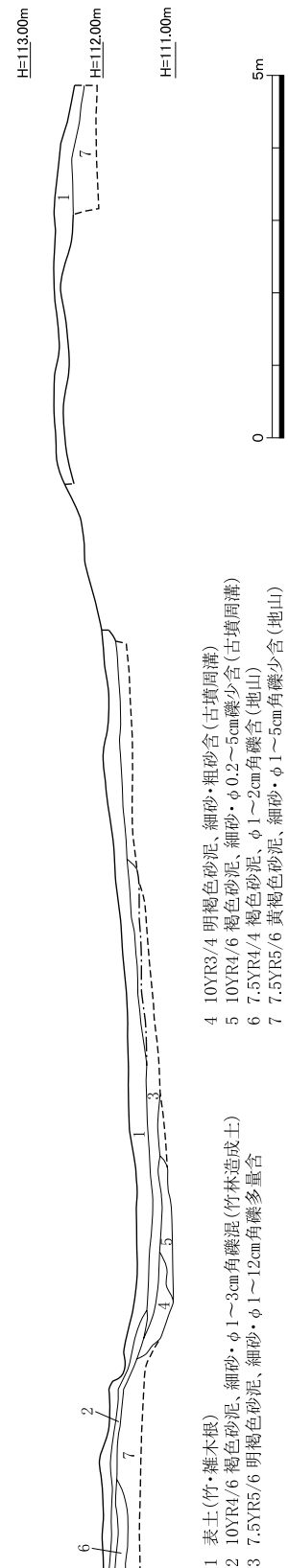


図5 1区西壁断面図 (1:100)

## 柱穴列

**検出状況** 柱穴列は、1号墳の左裾部から周溝の範囲で柱穴を3基検出した。柱穴7は、1号墳の墳丘盛土が削平を受け平坦面を呈する上面で、柱穴8・9は、1号墳の周溝上面で検出した。平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径約0.5m、深さ約0.2mある。柱穴内に角礫を用いた長軸約0.1m前後の根石を据えるものもある。柱筋が通ると想定すれば、柱間は、梁行約2.8m・桁行約5.1mの掘立柱建物に復元できる。北西側の1基は、未検出である。主軸方向は、座標北に対し東へ約28°振れる。

**遺物出土状態** 遺物は出土しておらず時期は確定できないが、埋土や形状から後述する土坑6と同時期の室町時代後期と考えている。

## 土坑6

**検出状況** 1号墳の奥壁北西部から北東部にかけて検出した大規模な遺構である。後世の石材抜き取りに伴い、墳丘北西端の一部を除き、墳丘ならびに主体部の大半を削平した工程で生じた痕跡を示す遺構である。この作業工程により古墳の封土の大半、主体部の奥壁の全て、玄室左側壁・羨道部右側壁が削平を受けたと考えている。土坑の南東側は、攪乱を受けている。検出面での現存規模は、奥壁の奥から羨道部端までの総延長で約9mに達する。

**遺物出土状態** 主に土坑内南東部を中心として、土師器皿・焼塩壺、および1号墳から掻き出されたと考えられる須恵器破片が出土している。土師器皿は、多量に出土しているが、大半は細片である。

## (2) 2区 (図6、図版5)

### 調査区の現況

2区相当地点の現況は、上部が削平を受けた状態の凹凸のある高まりが遺存している。文化財保護課の試掘調査(H19-3T)では、表土直下が地山となり、古墳の存在を示す遺構・遺物は、未検出であった。そのため、最も高い箇所にトレンチを1本設定した。

### 基本層序

当該箇所は、西から東に向かって緩傾斜を呈する。基本層序は、現地表から竹林表土が厚さ約0.1mあり、西側の竹林表土下は、厚さ0.1~0.4mの竹林造成土と考えられる盛土層があり、盛土層下は地山となる。

### 遺構

遺構は未検出である。

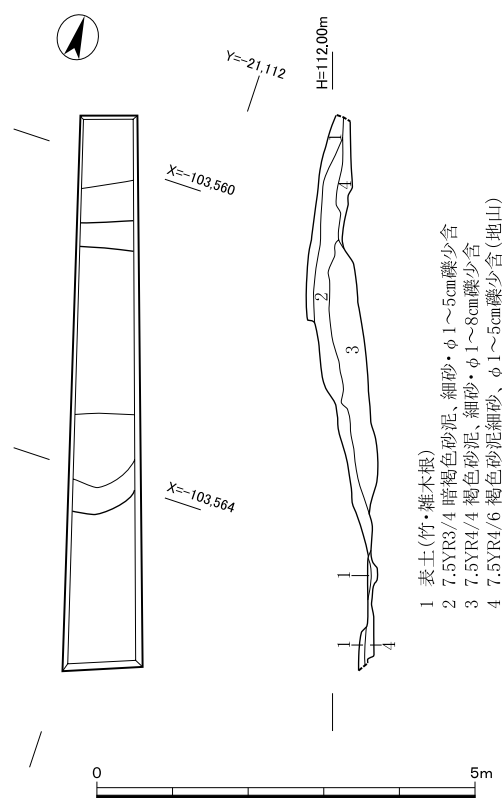


図6 2区遺構実測図(1:100)

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

出土した遺物は整理箱3箱ある。時代別では、古墳時代後期から室町時代後期に属するものがある。遺物内容には土器類、瓦類、金属製品などがあり、大半が土器類が占める。土器類には、古墳時代後期の土師器・須恵器、平安時代の緑釉陶器素地、室町時代後期の土師器などがある。瓦類には平安時代の鴟尾、丸瓦がある。金属製品には耳環がある。以下、時代別に主要な出土遺物を中心に述べる。

### (2) 古墳時代の遺物（図7、図版8）

古墳時代の遺物には、土器類と金属製品がある。土器類には、土師器甕、須恵器杯H・杯H蓋、杯G・杯G蓋、長頸壺などがある。金属製品には耳環がある。

土師器（1）土師器甕である。丸い体部に外上方に開く口縁部が付く。口縁端部は内側にわずかに肥厚させる。体部外面はナナメ方向の細かいハケメを施す。体部内面上半はヨコ方向のハケメを施す。口縁部内外面はナデを行う。体部上半から中位にかけて上下方向に幅を持たせた1条の沈線を巡らす。口径13.8cm、現存器高10.8cm。

須恵器（2～16）2～9は、杯Hである。小さな底部から体部がナナメ上方に立ち上がり、口縁部内面に立ち上がりを持つ。立ち上がりの形状は、受部と立ち上がりとの境界が明瞭なものと、断面形が三角形を呈するものもある。外面は、底部から体部下半にかけてヘラケズリを施すが、一部ヘラ切り痕が残るものもある。体部外面上半から体部内面は、ヨコナデを、内面底部は、不定方向の直線ナデを行う。法量から、2～5の口径9.1～9.8cm、高さ2.7～2.8cmのものと、6～9の10.6～11.2cm、高さ3.3～4.7cmのもの2種に分けられる。10～12は、杯H蓋である。丸みのある天井部から体部が緩やかに下がり、後円部は下外方へやや開く。天井部は、ヘラケズリを施す。他はヨコナデを行うが、天井部内面は、不定方向の直線ナデを行う。口径12.0～13.3cm、高さ

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器、金属製品		土師器1点、須恵器15点、耳環4点	0箱	1箱
平安時代	瓦、緑釉陶器		鴟尾1点、緑釉陶器素地1点	0箱	0箱
室町時代	土師器		土師器7点	0箱	1箱
合計		3箱	29点（1箱）	0箱	2箱

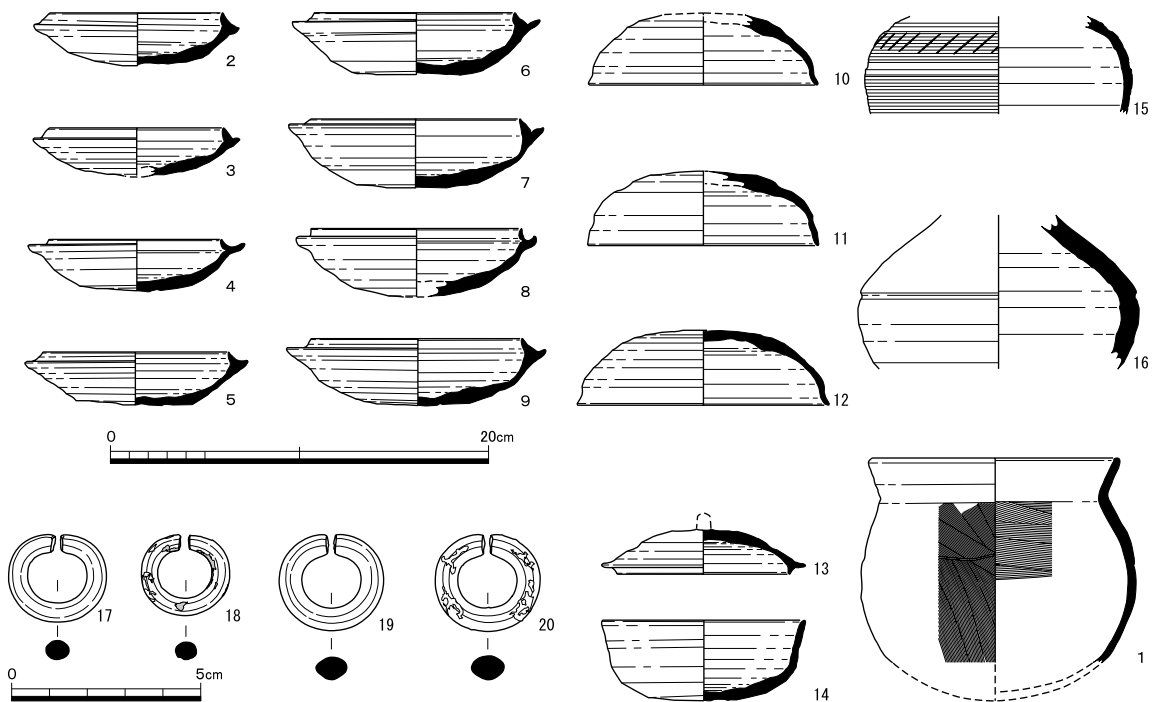


図7 石室出土遺物実測図（土器1：4、耳環1：2）

4.0cm。13は、杯G蓋である。14は、杯Gである。15・16は、長頸壺の肩部から体部にかけての破片である。15は、器壁が薄い。肩部と体部上半に2条の沈線を施し、その間に斜め直線文を巡らす。肩部から体部にかけて体部外面にカキメを施す。内面はヨコナデを行う。体部径14.1cm。16は、肩部と体部の境界に1条の沈線を施す。内外面はヨコナデを行う。体部径14.8cm。

耳環（17～20） 銅芯に金・銀の薄板を巻き付け、円形に整形したものである。17・18は金環、19・20は銀環である。法量から17・18と19・20は、それぞれ一対と考えられる。17は、器面ほぼ全面に金が遺存する。外径2.3～2.6cm、内径1.3～1.6cm、断面径0.5～0.6cm、重量11.779g。18は、器面ほぼ外面全面にわたり金が剥落し、緑青が覆う。外径2.1～2.3cm、内径1.3～1.4cm、断面径0.5～0.6cm、重量7.885g。19・20は、器面に黒錆が観察でき、銀製品と判断できる。19は、ほぼ全面に銀が遺存する。外径2.5～2.8cm、内径1.4～1.6cm、断面径0.5～0.6cm、重量19.238g。20は、器面の銀の一部が剥落し、緑青が覆う。外径2.6～2.8cm、内径1.4～1.6cm、断面径0.6～0.9cm、重量18.687g。

### （3）平安時代の遺物（図8）

平安時代の遺物には、土器類と瓦類がある。土器類には、緑釉陶器素地がある。瓦類には鴟尾・丸瓦がある。このうち、丸瓦は小片である。

緑釉陶器素地（21） 底部から体部下半の破片である。底部は、削り出しの平高台を呈し、体部は斜め上方へ開く。体部外面はヘラケズリ、内面はヨコナデを行う。器面に施釉痕はない。底部径6.4cm。表土から出土した。

鴟尾（22） 鴟尾胴部の右側面の破片である。縦帯体は凸帯によって区画され、珠文帯を配する。



鱗部外面に斜め方向の凹線をヘラ描きする。凸帯は貼付け後にナデを行う。珠文は半円球を呈し、貼付け後に円筒で外周を押し込む。全体成形は不明である。鱗部内面はナデを行う。胎土は小礫を含み、茶灰色を呈する。やや軟質。表土から出土した。

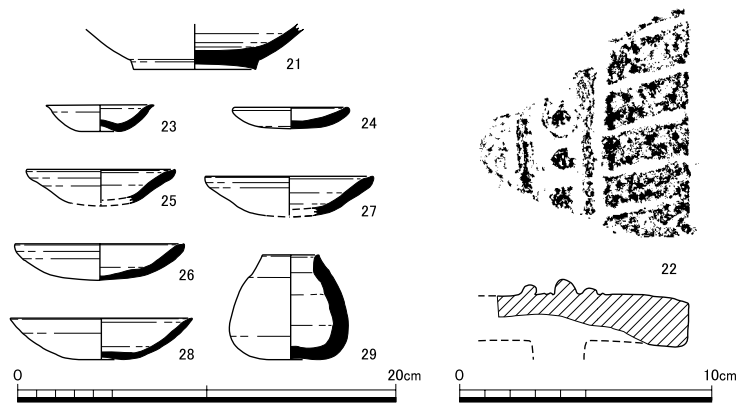


図8 土坑6・表土層出土遺物実測図（土器1：4、鴟尾1：3）

#### （4）室町時代の遺物（図8）

室町時代の遺物には、土器類がある。土器類には、土師器皿と焼塩壺がある。

土師器皿（23～28）形態から4種がある。いずれも器面はナデを行う。23は皿Shで、いわゆるヘソ皿を呈し、口縁部は外反する。口径5.7cm、器高1.4cm。24は皿Nrで、低い口縁部が付く。口径5.9cm、器高1.1cm。25～27は皿Sbで、口縁部がやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は小さく肥厚する。口径7.9～9.0cm、26の器高は1.9cm。28は皿Sで、口縁部が上方に立ち上がり、口縁端部内面に平坦面を有する。口径9.6cm、器高2.2cm。

焼塩壺（29）底部と体部の境界に最大径があり、体部は上方に向かって内傾する。内外面はナデを行うが、粘土接合痕が残る。口径2.9cm、底部径6.5cm、器高5.4cm。

## 5. まとめ

### （1）1号墳の現況

1号墳の調査前の現況については前述した。調査の結果、主体部の石材のみ抜き取るのではなく、墳丘封土の大半を崩し、削平し、その後羨道部と玄室の一部を除き主体部の石材の大半を悉く取り去った結果であることが判明した。墳丘封土を取り去った範囲は、奥壁のさらに奥から羨道部（開口部）まで達し、調査では土坑6とした。土坑6の年代は、出土遺物から室町時代後期（16世紀後半）と考えている。また、削平された墳丘南西側で、柱穴を3基検出した。遺物は出土しておらず時期は確定できないが、埋土や形状から室町時代後期と考えられる。これら状況から、1号墳の解体は、石材の再利用と、建物の建築を主な目的とした集団的契機によるものと想定できる。

主体部に使用された石材は、本山丘陵やケシ山で現在でも露出しているチャートを使用している。重機掘削中にも墳丘北東側周辺で広く大小のチャート片が出土しており、石材取り去り時に破損した石材が放棄されたと考えている。残存していた石材は、原位置で割れ目が生じたものもあり、運搬に不適な石材が残された可能性がある。

## (2) 1号墳の形態

1号墳の墳丘形は、周溝の残存状況から円墳であることが判明した。主体部は、袖石想定箇所での根石の残存状況から、上部に袖石の想定が可能となり、その検出位置から右側に袖が取り付く、片袖式の石室であることが想定できた。想定できる石室の平面形については、図9に示した。

## (3) 出土遺物について

1号墳からは、金環・銀環がそれぞれ一対ずつ出土しており、追葬が想定できる。また、須恵器には杯Hおよび、杯Gの杯・身が出土しており、このことを裏付ける可能性がある。須恵器の形態や法量からは、7世紀中頃を前後する年代が想定でき、本山古墳群の存続時期の一端を明らかにすることができた。

また、平安時代の緑釉陶器素地と考えられる21は、形態から平安京Ⅱ期<sup>4)</sup>に収まり、9世紀後半の年代が考えられる。調査地点に近接する本山官山窯では、当該期の緑釉陶器が出土している。また、22の鴟尾や丸瓦も平安時代のものと考えており、出土数は微量ではあるが、近接した地域に未発見の窯跡の存在を窺わせる。

土坑6から出土した土師器皿は、皿の種類や形態から平安京X期に収まり、16世紀後半の年代と考えている。

以上、本山古墳群の発掘調査に於けるまとめを述べた。本山古墳群では初の発掘調査であり、墳丘の大半が破壊を受けた古墳ではあったが、目的とした主体部の構造、墳丘規模、築造年代から石室解体時期に至るまで明らかにした。

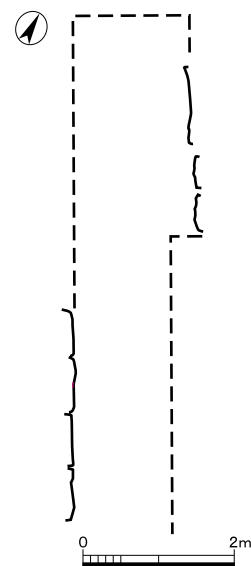


図9 1号墳平面模式図  
(1:100)

### 註

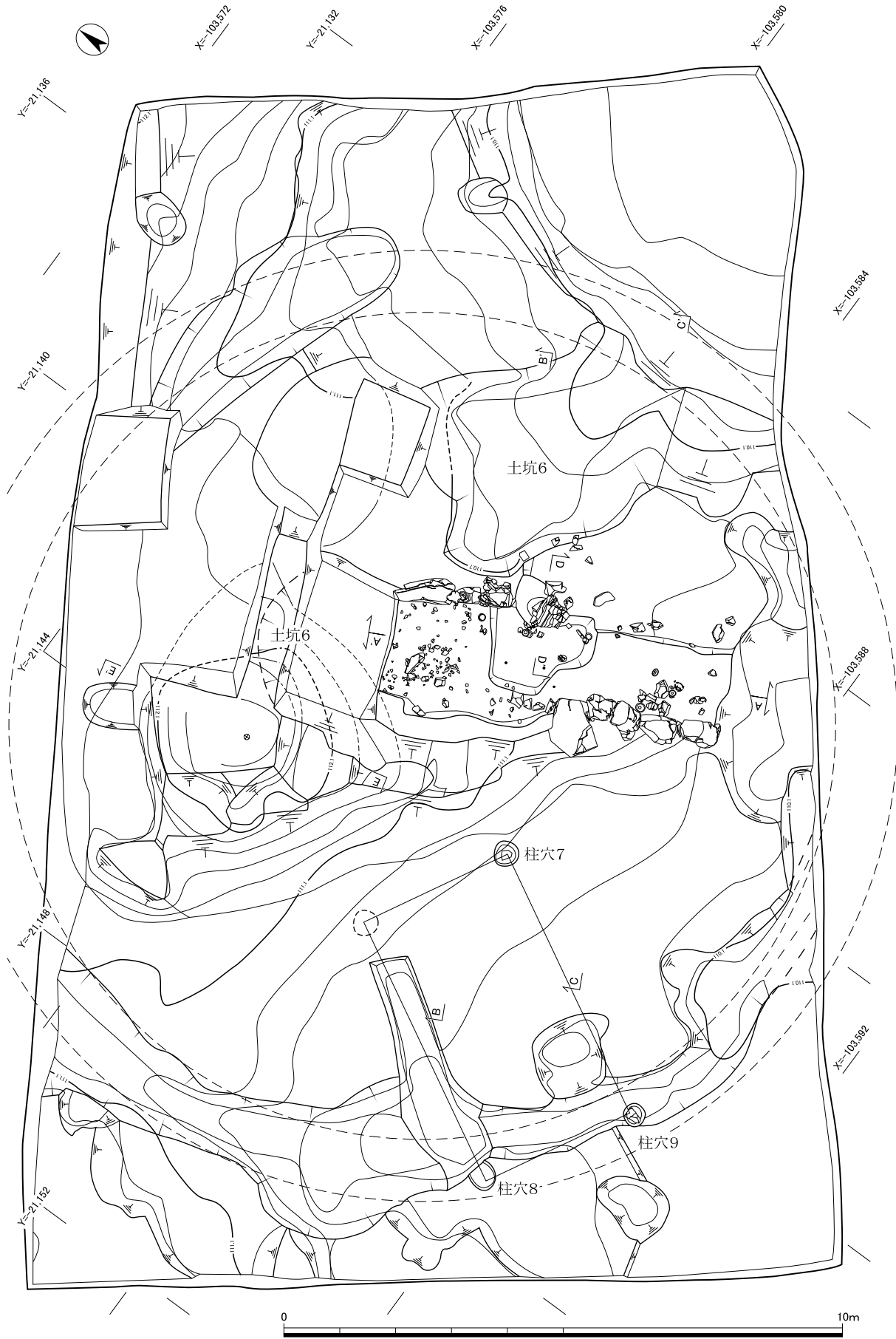
- 1) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 2) 『京都府遺跡地図 第4分冊』京都府教育委員会 1972年
- 3) 『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会 1992年  
『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年
- 4) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

# 図 版

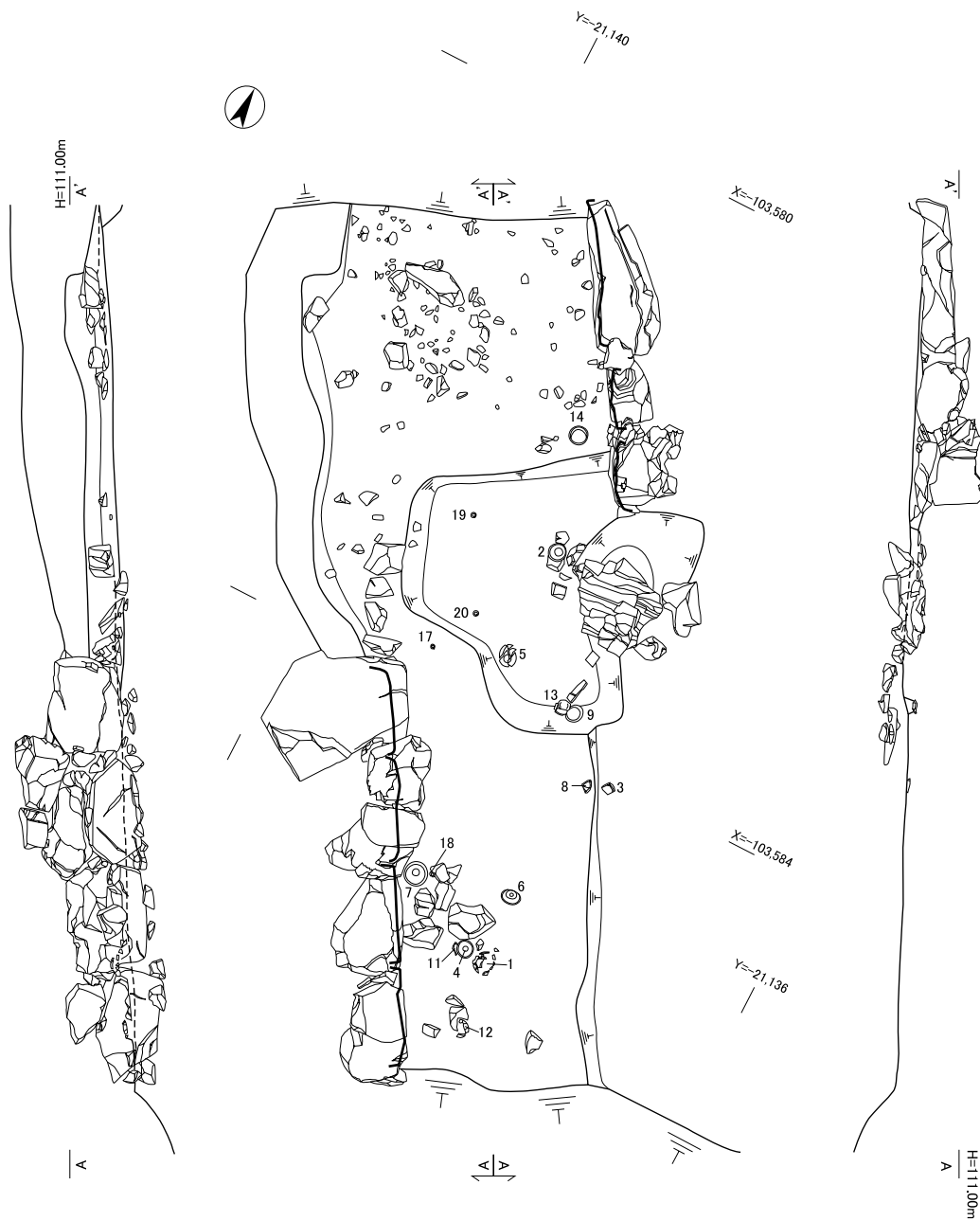




地形測量図 (1 : 250)



1区平面图 (1:100)



H=11.00m



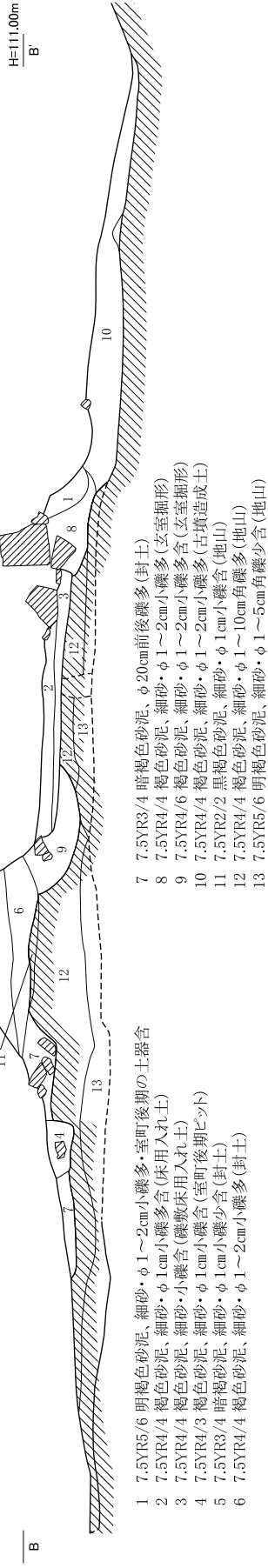
下面袖石据付根石

※ 図中の番号は遺物掲載番号である

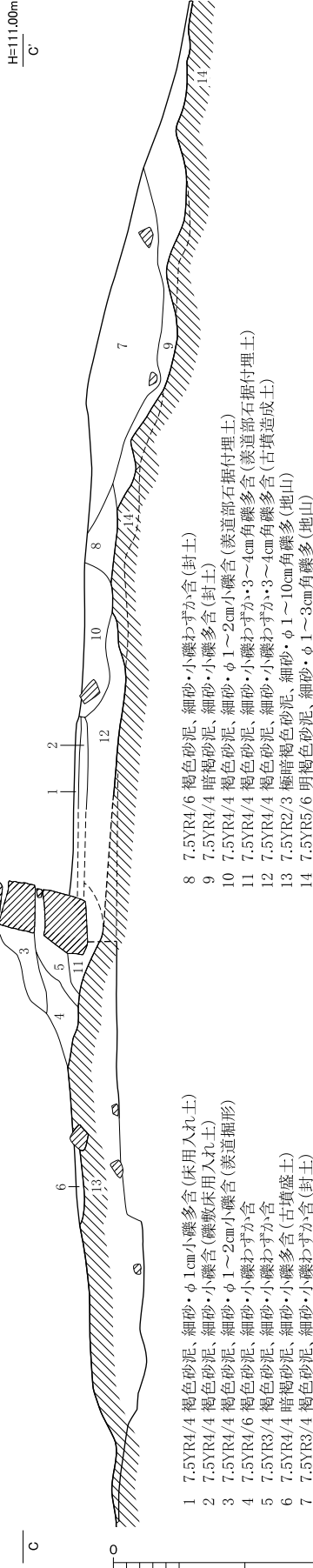


1区石室実測図 (1:50)

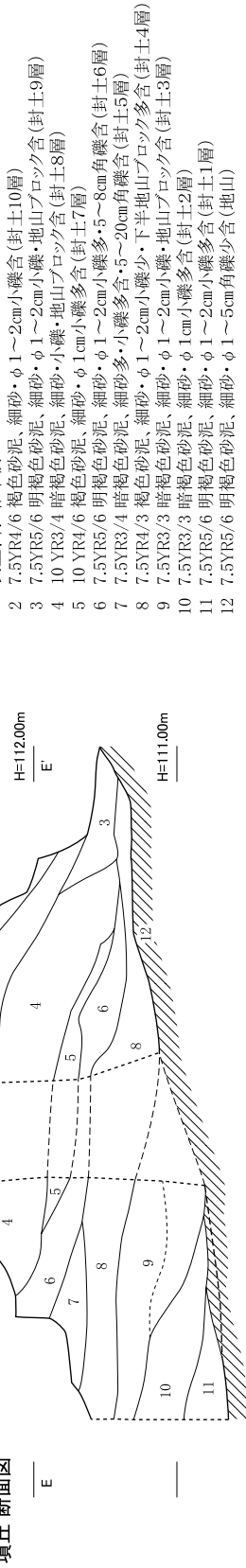
玄室断面図



羨道断面図



墳丘断面図







1 1区全景（南東から）



2 2区全景（南東から）



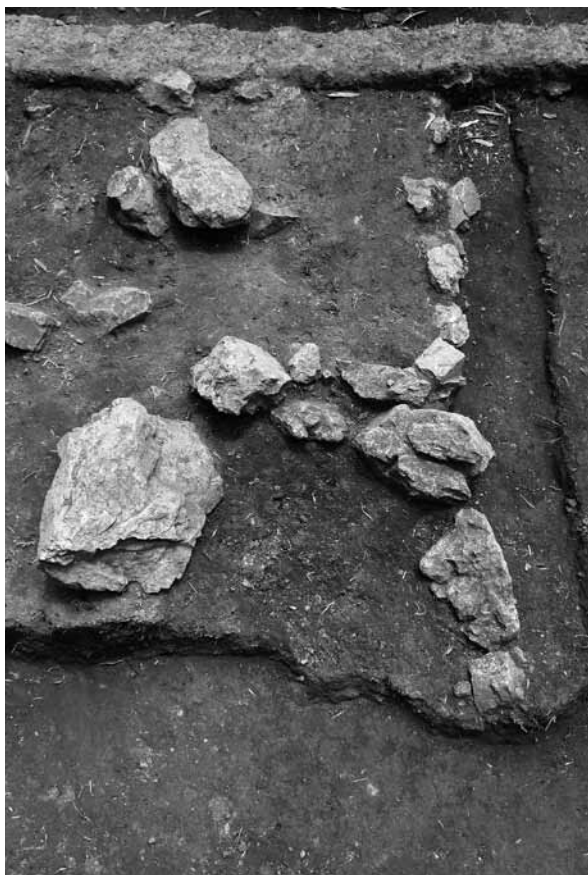
3 2区断面（北西から）



1 1区1号墳玄室石積状況（南西から）



2 1区1号墳羨道石積状況（北東から）



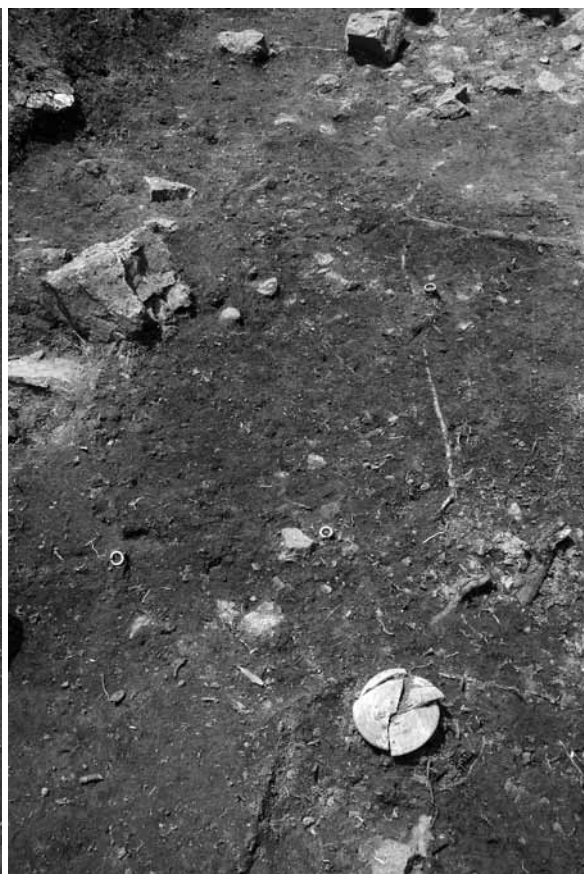
1 1号墳羨道部東側袖石据付掘形（北西から）



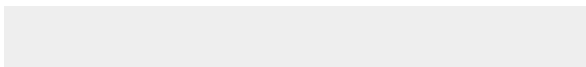
2 1号墳羨道部西側石据付掘形（北西から）



3 1号墳羨道部遺物出土状況（南東から）



4 1号墳玄室遺物出土状況（南東から）



1号墳出土遺物



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	もとやまこふんぐん							
書名	本山古墳群							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-5							
編著者名	辻 裕司							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとやまこふんぐん 本山古墳群	きょうとしききょうく 京都市左京区 いわくらはたえだちよう 岩倉幡枝町  333番3	26100	143	35度 03分 58秒	135度 46分 06秒	2012年5月 14日～2012 年6月8日	約340㎡	老人ホーム 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本山古墳群	群集墳	古墳時代	円墳 横穴式石室	土師器、須恵器、耳環		本山古墳群に於ける本格的な発掘調査。 横穴式石室を内部主体とする円墳1基検出。 平安時代の遺物は付近に当該期の窯跡の存在が窺える。 当該古墳が破壊を受ける契機を明らかにした。		
		平安時代		緑釉陶器素地、鴟尾				
		室町時代	土坑、柱穴	土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-5

## 本山古墳群

発行日 2012年8月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961